

さねとうけいしゅう

# 中国留学生史談



# 中国留学生史談

さねとう けいしゅう

第一書房 刊

昭和五十六年五月 八 日 印刷  
昭和五十六年五月十三 日 発行

## 中国留学生史談

定価 二、五〇〇円

著 者 さねとう けいしゅう

発行者 村 口 一 雄

発行所 第 一 書 房

113 東京都文京区本郷六―一六―二

電 話 東京 八一五―一〇七二

振 替 東京 四―三九一二〇

印刷 誠之印刷株式会社

製本 有限会社今泉誠文社

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

も  
く  
じ

# 第Ⅰ談 日本留学のはじめ ..... 1

|             |           |    |
|-------------|-----------|----|
| 1           | 留学生の来日    | 2  |
| 2           | 留学生はなぜ来たか | 3  |
| 3           | 留学生教育はじまる | 10 |
| 4           | 最初の留学の人々  | 13 |
| 第Ⅱ談 少数良質の時代 |           | 21 |

|             |           |    |
|-------------|-----------|----|
| 1           | 時代の空気     | 22 |
| 2           | 横浜大同学校    | 24 |
| 3           | 留学の論      | 32 |
| 4           | 日華学堂ものがたり | 36 |
| 5           | その成績      | 42 |
| 第Ⅲ談 日華学堂の教育 |           | 49 |

|   |          |    |
|---|----------|----|
| 1 | いとぐち     | 50 |
| 2 | 明治三一年の日記 | 52 |
| 3 | 明治三二年の日記 | 65 |

第Ⅳ 談

日本留学生生活

.....

103

|   |          |     |
|---|----------|-----|
| 4 | 明治三三年の日記 | 96  |
| 5 | おわりに     | 101 |

第Ⅴ 談

清国留学生会館

.....

133

|   |         |     |
|---|---------|-----|
| 1 | 縁起      | 134 |
| 2 | 機能      | 137 |
| 3 | 出版      | 141 |
| 4 | 位置      | 147 |
| 5 | 終幕      | 149 |
| 7 | 結論      | 131 |
| 6 | 東京の遊学   | 127 |
| 5 | 留学の順序   | 120 |
| 4 | 留学の経費   | 113 |
| 3 | 緒論      | 107 |
| 2 | 日本留学案内書 | 104 |
| 1 | ふえゆく留学生 | 104 |

.....

1  
かいせつ  
154

2  
本文  
155

第Ⅶ談

## 多数速成の時代

.....

187

1  
留學生の増加  
188

2  
留学生教育の学校  
193

3 留学生は何をまなんだか 206

4  
速成教育の廃止  
209

第Ⅶ談

## 留学生取締規則反対運動

.....

219

1  
ことのおこり  
220

2  
取締規則  
221

3  
取締規則反対運動  
224

4  
陳天華の死  
248

5 ある帰国留学生の日記 264

6 騒動の余波 281

## 第Ⅸ談

日本での「五・四運動」

.....

285

第Ⅹ談

松本先生と周恩来青年

..... 339

|   |                                              |     |
|---|----------------------------------------------|-----|
| 1 | 明治の留学生、大正の留学生                                | 286 |
| 2 | 二十一カ条条約                                      | 287 |
| 3 | 留学総会の公開状                                     | 292 |
| 4 | 留学生代表拘引事件                                    | 305 |
| 5 | 北京における「五・四運動」                                | 306 |
| 6 | 東京における「五・四運動」<br>(東京での「五・四運動」関係地図<br>314 対向) | 313 |
| 7 | 負傷者と被逮捕者                                     | 328 |
| 8 | 問題点                                          | 332 |
| 1 | 留学史とともに                                      | 340 |
| 2 | 留学生教育以前                                      | 341 |
| 3 | 初期の中国留学生教育                                   | 342 |
| 4 | 宏文学院時代                                       | 343 |
| 5 | 東亜学校時代                                       | 345 |
| 6 | 中国学事視察旅行                                     | 348 |
| 7 | 留学教育方針と中国観                                   | 355 |

## 8 戦争になる 359

(松本亀次郎先生年譜 361)

## 第XI談 「支那」の発生から消滅まで…………… 367

1 カラ・モロコシ 368

2 種子としての「支那」 369

3 「支那」の発芽 372

4 「支那」の発展 373

5 論 戦 378

6 占領軍命令 380

7 「支那」の衰運 382

8 「支那」の死滅 394

9 余 談 395

10 付 録 397

## 第XII談 日本と中国における留学と翻訳…………… 421

1 緒 言 422

2 日本の中国留学と翻訳 423

3 中国の日本留学と翻訳 427

あとがき

|           |           |
|-----------|-----------|
| 5         | 4         |
| 結 論：今後の研究 | 翻訳の言語への影響 |
| 440       | 436       |

# 第I 談

## 日本留学のはじめ

## 1 留学生の来日

ときは一八九六（光緒三二、明治二九）年の旧三月のすえつかた、清国からわが国へ、一三名の留学生をおくってきた。これが、留日学生のはじまりである。

一三名とは、唐宝鏐・朱忠光・胡宗瀛・戢翼翬・呂烈煌・呂烈輝・馮聞謨・金維新・劉麟・韓寿南・李清澄・王某・趙某。このうち呂烈輝については、げんざい（一九四三年）神戸領事館員であり、わたしとおなじ研究をしている汪向榮君が、てがみをよこして、「信すべき報道によれば、さいしょの留日学生中、呂烈輝というひとはいません。」という。しかし、わたしは、一三名のなかの一人、唐宝鏐氏からきいた名であるから、いまは、このままにして、うたがいを存しておく。

一三名の人々は、日本でいえば外務省にあたる総理衙門という役所で選抜試験をうけ、合格して日本におくられてきた。年齢はいちばん上が三二、いちばん下が一八歳（唐宝鏐氏談）。

ときの駐日清国公使は裕庚。ついでながら、この裕庚というひとは、清朝の連枝で、駐日公使のつぎには、イギリス、フランスなどの公使となった。このひとのむすめの徳齡は、フランスからかえってきて西太后の女官をつとめ、のち、アメリカ人に嫁してからいろいろ西太后のおもいでを小説につくった。わがくにでは、『西太后絵巻』（さねとう訳）、『西太后に侍して』（太田・田中共訳）の二

種だけが訳されている。

この裕庚は、一三名の教育を日本に依頼した。ちょうど、つごうのよいことには、そのころ日本の内閣で、外務大臣と文部大臣とは、西園寺公望きんもが兼ねていたので、裕庚は一三名の教育を西園寺に依頼したのである。西園寺は、その教育を、ときの高等師範学校長の嘉納治五郎に命じた。

## 2 留学生はなぜ来たか

これから、日本における留学生の教育がはじまるのであるが、ここで、はなしをすこしもとにもどして、中国からなぜ留学生がたくさん来るようになったか、ということ話したい。

いや、そのまえに、中国からこれまでに留学生をつかわしたことがあるか、ないか、ということをしるしておこう。

中国から外国に留学生をつかわしたのは、明治二九年にはじまったのではない。梁啓超の研究『千五百年前の中国留学生』によれば、晋から南北朝、唐にかけてのおよそ五百年間に、中国からインドに留学したものは、数百人であったことがわかる。

近世になると、中国は、アメリカに留学生をおくったことがある。それは宣教師につれられて、アメリカに勉強にいった容閑というひとが、曾國藩に説いて、はじめた。それは一二歳から一六歳までの幼童こどもを、まいとし三〇名ずつ、四年間つづけてアメリカにやり、一五か年ずつ留学させ

るという案であった。

一八七二年第一次留学生をおくり、一八七五年第四次留学生をおくったので、アメリカのハーバードには、一二〇名の中国留学生があつまった。

かれらは、いかように教育せられたかとみるに、「二人を一組として各紳士の家に分住、その家の子弟から英語をならう。」「かれらが西洋紳士の家に寄寓しているのをみたが、すこぶる群居切磋の楽しみを得ている。」(李圭《環遊地球新録》三か月のうち、二週間だけ、西洋総局、つまり留学生会館によびもどされ、中国人教師から漢文をおしえられる。

はじめて留学してきたときは、一二か一三のこどもである。それがアメリカ人の家にねおきして、アメリカ人の子供からアメリカ語をおしえられ、「群居切磋の楽しみをえた」のである。いいかえれば、漢文の素養のないものがアメリカの生活をしたのであった。中国人になりそこねて、アメリカ人がいになつていった。

かくて第一次留学生がアメリカにきてから一〇年すぎたとき、呉惠善というひとが留学生監督にきたが、留学生たちが、おのれにむかつて中国従来 of 礼式である拝跪の礼をしなかったので、「留学生は異国にきて、もとをわすれてしまつてゐる!」とふんがいし、朝廷に奏請して、ぜんぶの留学生を一律に撤回帰国させた。呉惠善は、じつに頑固な官僚で、「留学界三大敵」(容闳の《西学東漸記》のなかのことば)とされているが、わかい留学生は、一〇年間にアメリカ人化していたにちがいない。一律帰国させたといつても、そのときすでにアメリカの女を妻としていたもの、およそ一〇

人は、どうしても帰国しなかったことによっても、いかにアメリカ化していたかが想像せられる。いったん命令によって帰国したものも、すぐに私費留学をするために、アメリカへひきかえしたものが、すくなくなかった。

それほど、ながらくアメリカに留学していても、かえってみると、みんながみんな、ものの役にたたなかった。ただ例外は唐紹儀であろう。民国後、國務總理となり、抗日戦争中、抗日テロに暗殺された唐紹儀は、このときの留学生のうち、ただひとり、役にたった人物であった。アメリカ留学のさいしょの優等生唐紹儀は、日本留学のさいしょの優等生唐宝鏐のおじにあたる。唐一家がアメリカ留学、日本留学のさいしょの優等生をだしたのである。

そのほかの連中は、なぜ役にたたなかったか？ かれらが中国人でなくなっていたからだ。英語はよくしゃべれても、それを漢語にいかえる力がなかった。漢語を十分しらない中国人、漢語をわすれた中国人、であったからだ。

この幼童留学制度は、中国にとっては、まったく失敗であった。まだ国学の基礎ができていなかったからである。しかし、アメリカとしては、この一二〇名の留学生教育に成功をおさめたといつてよい。その成功のおもな原因は、中流家庭が、留学生を寄宿せしめたところにある、といつてよからう。

ともかく、この失敗にこりて、中国は外国留学の芽を折ってしまった。

それから二十年あまりすぎて、ここに日本留学がはじまったのである。

それは、なぜであろうか？

日清戦争に日本が勝ったからである。

つらつら日本と中国との関係をみるに、大むかしは中国から文化的えいきょうをうけることが多かった。菅原道真が遣唐使をつかわすことを止めるよう奏上して、そうなった後でも、なお学問僧の留学がつづいたほどであった。

元寇の役、はじめて中国とたたかい、倭寇がせめていったことがある。

でも、学問の方面、文化の方面では、やはり中国崇拜の風がつづいていた。この方面で、はじめて中国文化を批判し、日本文化を再評価しだしたのが江戸時代の国学であった。

でも、これは日本側のことで、中国側では、もとより、そのことをみとめず、おのれを文化的宗主国だとみとめていた。

中国がおのれを「中華」とし、他国を夷狄とみるのは、ながいしきたりであって、日本と同様に、西洋諸国をも夷狄視していた。さればこそ、アヘン戦争の南京条約にも、「英・清両国は、たがいに対等の礼を用うべく、夷狄蛮人と称すべからざること」という珍妙な一条があるのであり、さらにそれから二十年ばかり後の英仏連合軍にまけたときの天津条約にも、「すべて欧州人を蛮夷と称すべからざること」という一条が、かさねてくわえられている。

しかしながら、アヘン戦争や太平天国において、西洋の軍艦や大砲などのすぐれていることは、

中国人もみとめないわけにはいかなかった。

そこで曾國藩・李鴻章たちの洋務運動というのがおこる。洋務運動というのは、西洋の器巧、すなわち物質文明は、すぐれているから、まなびとる必要がある、というのである。もっともいいかえれば、道徳や政治や文学など精神文明は、中国にそなわっていて、これは西洋など、およびもつかない。この中国固有の学（道徳・政治・文学）はあくまでまもり、すべての学問の中心とすべきである。ただ西洋の器巧の学、すなわち物質文明には、すぐれたところがあるから、とりいれて、固有の学問の補助とすべきである。この思想を、ごく短い表現にしたのが、

「中学（中国の学問）を体となし、西学を用となす。」

というのである。これは、「中国の学問が主で、西洋の学問が従である。」といいかえてもよい。

中国の学問を中心とし、西洋の学問を補助としたのは、やはり中華中心主義ではあるが、従にせよ、補助にせよ、部分的にせよ、ともかくも、西洋をみとめたことは、注意を要する。

やがて、日清戦争後になると、康有為・梁啓超たちによる維新運動がおこる。維新運動というのは、中国従来のやりかたのように、孔子の道をもとにしているのであるが、その内容が、じつは西洋の民主思想ににている。ことに梁啓超は、西洋のさまざまな思想を紹介した。このころになるともはや西洋の精神文明をもみとめてきたのである。梁啓超はそのうえ、孔子の道には、今の世にあわぬところがあるといきった。この態度を、かれは、「不中不西、即中即西」といった。「中国にせよ、西洋にせよ、わるいところはすてる。中国にせよ、西洋にせよ、よいところはとる。」という